

第五七回卒業式式辞

本日、久留米大学附設高等学校は第五七回の卒業証書授与式を迎えました。

ここに、久留米大学薬師寺道明学長、各学部長、学校法人久留米大学前川博理事長、各常務理事、久留米大学附設高等学校同窓会古賀暉人会長、同窓会役員、久留米大学附設高等学校後援会眞名子文男会長、後援会役員の方々をはじめ多数のご来賓のご列席をいただきました。皆様には、お忙しいところを本校の卒業生のためにご出席いただき、感謝に堪えません。まことにありがとうございます。なお、また、福岡県麻生渡知事、久留米市江藤守國市長、筑後地区を始めとする各高等学校、中学校、小学校などからご祝辞をいただいております。

さて、卒業生の皆様、そして保護者の皆様、ようやく本校の卒業証書を手にするときが参りました。保護者の皆様には、

よくここまで頑張ってくれたとお子様を改めて誇らしくご覧になっておられると存じます。また、卒業生の皆様は、この日を迎えて、保護者や先生、それから、同級生、先輩、後輩と自分たちを支えてくださった人たちを思い起こして、改めて喜びと感謝の気持を味わっていると思います。

この卒業は、考えて見ますと、卒業生の皆様にとっては新しい世界に踏み出すための一步に過ぎません。もちろん、千里の道も一步からというような言葉もあるように、一步一步は大切ですが、その中でも極めて大事な意味がある一步ではあります。取り敢えずは、大学に進む、まだ、この時点では入学試験の結果がはっきりしていない人が多いでしょうが、少なくとも向う何年かは学生として保護された環境で過ごすつもりでいることができると思います。それでも何年か経ちますと皆さんが先頭になってより積極的に世界を少しずつ動かして行くようになります。

世界を動かすなんて、そんな思い上がりなどんでもないと考えているかも知れません。全く他人の言いなりに行動す

るだけというのならともかく、どんな場合でも自分なりに仕事の計画を立て実行していかなければならないのですから、自分の働きで世界が動いているのは考えてみれば当然です。ですから、ここで、敢えて覚悟という言葉を使いますが、自分の働きで世界が動くだけではなくて実際に少しずつ変わっていつてしまうということはしっかりと覚悟して受け止めておかねばなりません。

つまり、問題は自分が関わることによる世界の変わり方です。自分の働きが世界を変えているかも知れないという感覚、自分の働きで世界を変えられるかも知れないという自覚、さらに、自分は世界をこう変えていきたいという意識の間には大きな差があります。だが、思い通りではなくても自分が動けば世界も変わってしまう。言い換えると、自分は一人だけで生きているわけではない。自分の動きが予想外の結果をもたらしたり、他人の働きが自分に影響したりするわけで、そういうことは多かれ少なかれ今までもあったはずです。しかし、こういうことの意味を改めて考えたことが皆さんにあったかどうか。

一体、皆さんに何を考えてほしいと、この機会に問いかけているのでしょうか。結局のところ、自分にとって人生とは何か、人として生きるとはどういうことか、つまり、生きるということはどういうことか、そういう問を皆さんに考え続けてほしいと言っているのですが、これは昔から誰もが考えてきた問で完全な答えがすぐに出るわけではありません。わたくしも自分なりのヒントしか持ち合わせがないというか申し上げられません。

それどころか、昔は、生きるとはどういうことか思い悩んで先に進めなくなってしまう人も多かったようです。しかし、生きるということを追求することは、現に生きていて、なお、その価値を探り続けるということであるはずで、ただ、生きるということだけを問として切り出せると考えるということは問題への取り組みが最初から間違っていたことを示します。そして、そもそも間違いは、生きるということを自分だけのことと把握した点に尽きるわけです。人間は自分だけから成り立つ世界では生きられない、この自明なことが承認できないどころか全く思い浮かばないから、そして、

まさにそのことを証明するように、答えらしきものに一步も近づけないまま、今自分が生きているということへの悦びもなかなか感じられないということになってしまっただけです。

実は、本校の建学の精神がこの問、生きるとはどういうことか、という問に答えるための大きなヒントになります。建学の精神は、かつての原巳冬校長先生が整理された形で復習いたしますと、『国家・社会に貢献しようとする為他の気概をもった誠実・努力の人物の育成』です。特に、「為他の気概」という言葉、これは、人のため世のために正しいことを果たそうとする信念と言い換えられると思いますが、この言葉こそが生きるということの根源にあると思います*。

人間は自分だけから成り立つ世界では生きられない、つまり、人間は他人がいる世界で始めて生きていくことができるというわけですが、これは一体どういうことなのでしょう。

それは、つまり、自分だけではない、他人も同時に生きていて、しかも、お互いに生かしあっている、さらに、一歩進めれば、他人に喜んでもらうことが自分の喜びであり、また、

他人から喜びをもたらされるのが自分にはうれしい、そういう意識に目覚めることであろうと思います。

何か、こう言うと、極めて陳腐で、あちこちに掲げてある標語と全く変わらないようですが、字面や上面のことだけではなくて、こういうことを多少とも実感できるかどうか、それが生きるということではないでしょうか。わたくし自身は、まだまだ未熟なものですからの確には答えが出て来ないのですが、誠実に生きれば段々と実感も深まっていく、そういうことだろうとは薄々ながらわかります。

繰り返しますと、人に親切にする、人の親切に感謝する、そういった水準のものから人のために働く、人に喜んでもらえるような仕事ができうれしい、今この世にある人たちだけでなく、また、周辺にいる人たちだけでなく、未来の人たち、遠くの人たちにも役に立つような仕事をしたい、そういう思いがいささかでも実感できること、それが生きるということではないでしょうか。

これはわたくしからのヒントでしかありませんが、これが

ら皆さんに自分なりの答えをじっくりと出してほしい、そして、必ず出してくれるだろうと信じています。

皆さんには、久留米大学附設高等学校の卒業生として、先輩たちや、やがて皆さんの後に続いてくる後輩の人たちと一緒に、これからの長い人生を、国家・社会、さらに、世界全体に、為他の気概をもった誠実・努力の人物として、しっかりと貢献してくださることを期待して、わたくしの式辞を終わります。

平成二十一年三月二日

久留米大学附設高等学校長

吉川 敦

(以上)

※ 正法眼蔵の中に趙州禪師の言として『為他知而故犯』(他のために知ってことさらに犯す)がある。すなわち、他のために泥だらけになるとわかっていてもその泥の世界の中に敢えて入って行って行為するという意味である。立花純二教諭のご教示に拠る。